

海人

かいと

明神崎のアワビ開口風景 (写真提供：早坂正典 氏)

ごあいさつ

宮城県漁業士会 会長 阿部 正春



二〇〇六年も早二ヶ月が過ぎ、ワカメ漁が最盛期を迎え、春漁が本格的に始まるうとしております。会員の皆様にはご健勝の事とお喜び申し上げます。また、漁業士活動におかれましても皆様には絶大なる御協力を頂いております事に対し心より感謝申し上げます。

さて、初めの予測とは裏腹に年末から一月にかけて日本列島記録すくめの大変寒い日が続き、強風による列車脱線事故、さては雪の為亡くなられた方が一〇〇名を超すなど、大変な猛威を振るいました。その中で我々の業界でも今までとは違った諸問題と直面している訳であります。皆さんの経営を圧迫しております燃油の高騰、また一県一漁協宮城県漁業協同組合(仮称)の構築を目指す合併問題など私達漁業士も多いに関わっていかなければならない諸問題が山積しております。このような中、活力のある漁村地域づくりの中核となり宮城の水産の確立にむけて総力を結集し、取り組んで行く必要があると思います。

安全、安心な食品の提供が叫ばれる中、また、消費者ニーズの多様化により我々漁業者は日々多大な努力と工夫に取り組んでいるところであります。そう言った中、やはり一般の方々にも私達の仕事を知って貰わなければなりません。当会では前年に引き続き消費者との交流を図る為、漁業士交流促進事業として交付金を交付しておりますので多くの方々に御活用して頂きたいと思っております。

最後になりますがここ二件ほど大変悲しい事故が起きております。海、陸と作業されます時には十分注意され宮城県の漁業士であるという誇りを持っていただき益々活躍されますよう御願いたしますと共に会報発行にあたり皆様の御協力に対しまして一言御礼を申し上げ挨拶いたします。

平成十七年度 一次産業交流会について

宮城県漁業士会事務局

農林漁業の担い手が一堂に会した一次産業交流会が平成十七年七月十四日から十五日まで鳴子町、岩出山町、古川市で開催されました。漁業士会からは阿部会長を始め、四名の漁業士が参加しました。今回は「地域資源を商品に」をテーマに、生産ばかりでなく、付加価値を付けた販売戦略について、林業分野の取組事例を視察しました。なお、視察の概要は次ぎのとおりです。

○青田全一氏の山林経営

スギの生産の他、青森ヒバ、ヒノキ、サワラなどの多様な樹種を育成し、自分の代ではなく次世代以降の収穫を目指す経営哲学のもと、四十年以上林業に従事してきました。

樹齢三十五年のサワラは実際に材料として利用できるのは三十五年後の樹齢七十年になってからです。農業は一年ごとにやり直しがききますが、林業は一度植栽すれば、七十年はやりなおしがききません。このため、短期的な視点では経営はできません。木は伐採するまで成長します。時間の力を借りるのが林業です。

○財団法人佐々君治山報恩会の山林経営

鳴子町鬼首温泉地内の樹齢九十年、百二十年のスギ林（直径四十五、七十cm、樹高三十、四十m）で、事務局長の佐々木治樹氏から話を伺いました。佐々木自身が林業を手がけてから四代目にあたり、昭和二十八

年に財団法人を設立した経緯の説明がありました。相続税の問題があり、山林を維持していくために山林を寄贈し財団法人化を図りました（戦後の税制改革によるもの）。

抜き切りした材料が、大崎木材ネットワークの古川市塚目の住宅に使用されています。

木材の伐り出しは、架線集材という空中にワイヤーを張り木材を運ぶ方法で行い、重機を使用するための作業道等の開設を伴わない森林保全型の作業を行っています。

○大崎材利用ネットワーク

佐々君のスギをメインに使用した大崎材利用ネットワークのモデル住宅二棟を視察し、設計者及び施工者の説明を受けました。

二棟とも、三、四名程度の入居者を想定した住宅で、構造はもとより、床をはじめとする内装材にもスギを使用しています。

○エステックウッド(株)

宮城県工業技術センター（現産業技術センター）が開発した熱処理木材の製造販売を手がけるエステックウッド(株)において、熱処理木材の製造方法、特徴及び商品開発について説明を受けました。

熱処理木材は主に浴槽に使用され、スペインのリゾートホテルに輸出されるなど、高級品として認知されています。宿泊したリゾートパークオニコウベの浴室も熱処理木材です。

熱処理木材を製造には、処理する前に十%程度まで人工乾燥した木材が必要で、その後の加熱処理スケジュール等を含めて極めてデリケート

な処理技術が必要です。そのため、製造コスト等の問題で一般への普及が遅れていましたが、環境への配慮等から設計関係者、施工関係者の問い合わせが増加しつつあります。

○岩出山あゆ漁業生産組合

千葉寅次郎組合長から話を伺いました。

河川放流用あゆの生産を行っている組合で自力で施設を整備しました。特に上屋はビニールハウスを活用した施設で経費節減を図っています。放流用以外は一尾二百円で販売しています。

○農産物直売所「シンフォニー」

福原寿枝代表から農産物、農産加工品の直売施設の運営状況についての話を伺いました。「生産者の直売」というイメージを大切にしながら運営しています。年間三千万円、一日あたり十万円万円程度の売上です。



佐々君治山報恩会所有林（樹齢86年）

平成十七年度 東北・北海道ブロック 漁業士研修会について

宮城県漁業士会事務局

平成十七年七月二日から三日まで青森県八戸市で東北・北海道ブロック漁業士研修会が開催され、来賓の水産庁普及指導官高瀬さんをはじめ、総勢九十四人が参加しました。講演は、(社)青森県ふるさと食品振興会専任アドバイザー（前イトーヨーカ堂食品事業部生鮮食品担当総括マネージャー）の中野勝輝氏と野辺地漁業協同組合副組合長の山縣勝彦氏からいただきました。

（講演概要）

（社）青森県ふるさと食品振興会 専任アドバイザー 中野勝輝氏

少子化、高齢化、核家族化等、社会は変化している。社会の変化とともに消費構造も変化している。消費全体に占めるサービス消費の比率が増加し、家庭内調理も減少している。従来のやり方を変えていく必要がある。客は誰なのか。ニーズは何かを捉えることが必要である。商品ありきの売り手市場は過去の商売である。売り手市場から買い手市場になっている。消費者は顔の見える安全・安全なものを求めている。

このような状況の中で、「攻めの農林水産業」を推進している青森県ともタイアップし、量販店のイトーヨーカ堂と青森県内の漁業協同組合の野辺地漁協と平舘村漁協とで流通改革の取り組みを行った。どちらの

漁協でも生産価格が低迷しており、漁家所得向上のための使命感を持っていた。オンラインワンを目指す漁協の取り組みに共感した。

野辺地漁協では、全国に先駆けて出荷管理情報システムを整備し、販売に当たっては生産者、水揚げ日、消費期限を表示しており、消費者が購入する際の情報を明示している。

平館村漁協では、量販店との直接取引による朝採れ鮮魚のブランド化に取り組んでいる。平館村から青森市までは約一時間であり、水揚げされた魚は当日の十一時頃には販売が可能である。このように産地と量販店が直接取引することによって鮮度の良い、安全・安心な、生産者の顔がみえる商品としての差別化に取り組んでいる。

消費者は安全、安心、健康なものを求めている。客の立場で発想、行動しなければならぬ。これが商品開発の基本である。農林漁業者は今がチャンスである。今こそブランド化の推進すべきである。これは全ての商品に言えることである。

野辺地漁業協同組合副組合長

山縣 勝彦氏

野辺地漁協の生産量の九十五%はホタテとなっているが、生産金額が低迷している。付加価値を付けるため産地直送の「活ホタテ」に活路を求めた。他の団体や企業の追従では効果が期待できない。より消費者に近い目線で販路拡大を目指した。

社会情勢は〇一五七、産地偽装等により食への信頼が低下していた。消費者が安心して食べられるホタテ

ガイを供給するために生産者自身によるシステムの構築を目指した。量販店との直接取引の他、新聞、TV、ラジオでの宣伝、各地イベントにおける展示試食を行った。また、生産履歴に関する情報を消費者に提供している。今年度中に履歴に関する情報をさらに充実させる。消費者にさらなる情報の発信を行う。

（パネルディスカッション）

二日目には「安全・安心な水産物の供給体制の整備について」をテーマにパネルディスカッションが行われ、本県からはパネラーとして畠山政則指導漁業士が参加しました。



東北・北海道ブロック漁業士研修会

女性漁業士 交流研修会について

宮城県漁業士会事務局
平成十七年度女性漁業士交流研修

会が八月三十日から三十一日まで宮城県気仙沼市大島で開催され、青森県、岩手県、宮城県の女性漁業士十五人の他、初めて茨城県、千葉県から三人の女性漁業士が参加しました。

交流会では、「女性漁業士の活動状況と今後の展開方向について」をテーマに活発な意見交換が行なわれました。主な意見は次のとおりです。

- ・どの県でも女性漁業士の数が不足している。
- ・漁業種類が多岐にわたり、繁忙期が違うので、全員が集まる機会がない。
- ・女性農業士の数は増えており、宮城で百九名中三十名が女性農業士である。女性漁業士も女性農業士の先進的な部分を取り入れていったらどうか。

- ・女性漁業士間の横のつながりが少ない。漁業士に限らず、地元的女性との交流も考えるべきである。

- ・岩手では男女共同参画が話題になった時に一気に男女参画についての意識が広がり、漁業士会の役員にも女性二名が入るようになった。岩手の女性漁業士は本人が漁業に携わっていないこともなることができ、役員にもなっている。

- ・漁業者の家族協定（家族内で給料や休日、役割分担等の取り決めに交わす）は、青森二件、岩手八件、茨城二件、宮城一件と数が少ない。農業では、家族協定を結ばないと認定農業者にならない。

- ・女性は妻、母親として忙しく、なかなか時間がない。農業と漁業では形態が異なるので、家族協定が難しい。

い部分もあるが、行政による家族協定の知識の普及や家族のフォロー体制が必要と考える。

ここで、参加した方々の感想を紹介します。

○指導漁業士 尾形 静子さん

今回は茨城県、千葉県の女性漁業士が女性漁業士交流会に初めて参加され、青森県の女性漁業士さんからはフランスでの漁業士海外派遣研修視察研修の紹介や岩手県女性漁業士の家族経営協定等、活発な意見交換があり、有意義な交流会でした。

今回の交流会で感じたことは宮城県では女性漁業士の活動、女性漁業士の交流が少ないということでした。私もいろいろな面で勉強不足であると感じました。今後、男性漁業士の良きパートナーとして自分達の生活の安定化と漁業士活動の活性化に努めていきたいと思っています。

○指導漁業士 山内 典子さん

家族経営協定について興味を持ちましたが、家族の理解と協力がなければ絶対にできることではないと思いました。いろいろ苦労もあったとは思いますがそれを実行している岩手の女性漁業士の方は素晴らしいと思います。家族経営協定について、男性漁業士の方々の意見も聞かせてほしいです。

○指導漁業士 江刺みゆきさん

他県の女性漁業士は年間計画を立てて研修会や意見交換等多様な活動をされていることに驚きました。宮城県でも今後、女性漁業士だけの意見交換や漁業女性部員との交流等を是非実施していただきたいと思

ます。また、活動の活発化、リーダーの育成のため一人でも多くの女性漁業士を育成していく必要があると感じました。これからは男性だけでなく、女性もリーダーとして共に活動していくことが今後の男女共同参画社会に必要なと思います。



女性漁業士交流研修会参加者

支部だより

▼南部支部

8名の漁業士が加入

平成十七年四月一日に旧矢本町と旧鳴瀬町が合併し、東松島市が誕生しました。

これに伴い漁業士会中部支部に所属していましたが矢本漁協に所属する八名の漁業士の方々が、南部支部へ加入されましたので報告します。

加入された漁業士は次のとおりです。

青年漁業士 四名

阿部 雄美 青年漁業士
野村 秀友 青年漁業士
津田 正次 青年漁業士
阿部 源史 青年漁業士
指導漁業士 四名

相沢 勝利 指導漁業士
三浦 正信 指導漁業士
及川 輝明 指導漁業士
三浦 一郎 指導漁業士
南部支部の会員数は平成十八年一月末現在で、青年漁業士二十二名、指導漁業士二十名の計四十四名となり、今後の支部活動において益々の発展が期待されると思います。

先進地視察研修 「長崎県における鮮度保持の 技術及び活鮮魚のブランド化 取組について」

青年漁業士 赤間 辰之

(関上漁業協同組合)

近年の漁業生産は、資源の減少、魚価安により、生産量・金額とも年々減少傾向にあり、これらの対策として、貴重な資源に付加価値をつけ資源の有効利用を図ることが挙げられますが、具体的な手法が私達漁業者の課題となっております。

仙台地方振興事務所水産漁港部では、この課題を視察研修のテーマとして取り上げ、活鮮魚のブランド化に取り組んでいる長崎県内の漁協での視察研修が行われました。この研

修には私を含め、二人の漁業者が参加しました。ここでは視察研修の概要について報告します。

視察先の新三重漁協は、長崎県のブランド魚に認定を受けている「ごんあじ」を取り扱っています。同漁協において、ブランド魚確立までの経緯と現在の取組状況について意見交換を踏まえて話を伺いました。

新三重漁協では、資源の減少と魚価の低迷という漁業環境から、主体を活魚に切り替え、安定的な出荷調整を維持しつつ、水産物の付加価値向上を図る取組を行いました。

意見交換の中で私が一番感心した点は、活魚取扱いの取組のなかで、セリを行わず、組合職員自らが流通経路を確保し、販売単価も年間を通して同額と定めるなど、徹底した流通と組合内の体制づくりを確立したことでした。しかし、活魚だけでは、取扱いする業者が決まってしまうことと、遠方への販売拡大を図って考えたのが、活け締め技術でした。

今回の研修では私たちが実際の活け締め作業を行う、技術指導を受けました。

ここ新三重漁協では神経抜きによる活け締めが主流で、活け締めのあとの魚体の鮮度保持や消費時間に合わせた冷却温度、更に箱詰め方法など独自の規格・基準を設けて出荷が行われていました。

私たちも、実際に活け締めて漁協職員の指導のもと行ってみました。これがなかなか難しく、魚を傷つけないように、目の上中央あたりの所に千枚通しの様なもので穴をあけ、

針金で脊髄の上から尾の先までの神経を抜き取るものでした。

これからの本県水産業は消費者ニーズに即した販売とブランド化の促進が必要と思われますので、現行体制の見直しを含めたブランド化の促進が必要と感じました。



活け締めの実演指導

▼中部支部

漁業士会中部支部研修会を 振り返って

青年漁業士 渡辺 悟

(石巻地区漁業協同組合)

平成十七年八月二十三日、宮城県水産研究開発センターで開催された漁業士会中部支部の研修会に参加しました。研修会は最初に宮城県石巻地方振興事務所水産漁港部の阿部部長から平成十七年四月六日にオープンした「石巻しみん市場」の取組みについて講演していただきました。

講演では、高齢化の進行と後継者不足、魚介類消費の減少など宮城県の水産業の現状を説明していただきました。その中で「石巻しみん市場」は本県の水産物特に地元でとれる豊富な水産物を直接消費者に知ってもらい、生産者直結の市場として水産物の消費拡大を目的として設立されたものでした。

私はカキの養殖を行っています。自信を持って生産している私たちの生産したかきをもっと地元の人に消費してもらうには、消費者を考えた前向きな取り組みが必要だと思います。また、生産者自身の意識を変えること、漁場の利用の仕方や、身入りの良いカキを生産するためにはどうすべきか、生産量を増やすだけでなく良いカキを生産して行くことを考えていかなければならないと思いました。

第二部では産直の実践・直売経営管理について、弘前大学の渋谷長生助教授と青森県特産品センター津軽藩ねぶた村の中村元彦理事長から講演をいただきました。先生方は対話方式で講演され、参加者の意見を聞きながら進んで行き、聞いていてとても楽しく、参加者と一体となったとても活気のある研修会となりました。

先生方からは産直の実践ということで、ねぶた村の様子をお話いただきました。産直で重要なことは、販売員も含め客が語りかけやすい状況を作ること、水揚げされた時の話題を持つこと、季節季節で旬のものが揚がったら新聞社等への投げ込み等

旅行雑誌に掲載されるくらいの宣伝ができれば良いこと、宅配発送は速やかに対応する等、具体的に貴重な産直のお話を聞くことができました。地産地消が叫ばれる中、「石巻しみん市場」のような直売所は地元のものを地元の人に知ってもらう重要な場所であると改めて思いました。産直は生産者が苦手とする対面販売ですが、私自身も産直について前向きに取組みたいと思います。今回の研修会は今後産直に関わって行くためのためにとっても勉強になりました。



中部支部研修会開催状況

マリANCHALLENGEスクールに参加して

指導漁業士 江刺 みゆき

(石巻地区漁業協同組合)

平成十七年七月二十六日から二十八日の三日間にわたり、宮城県主催のマリンチャレンジスクールが開催

され、中部管内の中学校三校から十三名の生徒が参加し、水産業に関する講義、漁業体験、関連施設見学が行われました。漁業士会中部支部では七月二十八日の最終日に役員を中心に漁業体験の指導者、講師として参加しました。

午前中の地曳き網体験は、風が少し強く波が高い状況で出来るかどうか心配でしたが、予定通り行うことが出来ました。網を曳き上げるたびに、ヒラメ、メバル、セツパ、フグ等、様々な魚が獲れ生徒達も進んで魚に触れ喜ぶ姿がとても印象的でした。

今回のスクールでは、漁業士が積極的に参加し、地元石巻地区漁協女性部の協力も頂きながらの魚種普及活動と地曳き網で獲った魚を使用した裁き方や調理方法についての体験指導も行いました。生徒達や関係者の方々と一緒に試食会を開催し、美味しく頂く事ができました。生徒達も自分で獲った魚を直接試食することが出来、忘れられない体験になった事と思います。

午後からは、漁業士による講義が行われ、中部支部から役員も参加し「宮城の水産と食について」と題して受講生と対話形式で講義が行われました。始めに石巻東部漁協の阿部悟指導漁業士からカキ養殖について実体験に基づいた話が行われました。私からは魚食普及について、料理教室や食に関する話を行いました。話が進むにつれて、半数以上の生徒が魚が好きでよく食べているとのことのでびっこりました。私が感じてい

た事は、現代の子供達はどちらかと言うと、魚料理よりも肉料理を好み野菜等もあり食べていないような気がしていました。今回、生徒の多くは沿岸部からの参加が多く、家業が漁業を営んでいる生徒が多い等、普段から魚にふれあう機会が多く、身近に接することが重要だと思ふとともに魚が好きで良く食べていると言う事を聞き安心致しました。

宮城は水産物の宝庫です。魚を沢山食べて健康で明るく、思いやりのある生徒達であって欲しいと思います。三十分程度の講義ではありましたが、取り留めのないお話をしたにも係わらず生徒達は、熱心にメモを取ったり、質問をしたりと和やかなひとときを送り、無事マリANCHALLENGEスクールを終了することが出来ました。



宮城県漁業士会中部支部による講話

▼北部支部

体験学習を通じて

青年漁業士 最知 隆

(歌津町漁業協同組合)

私は、地元の小学校を対象に毎年三年生にはワカメ、四年生にはホタテの体験学習をお世話しています。

ひと昔前までは、こんなものはわざわざやらなくとも、地元の子供達とは、友達を通じて、あるいは家庭を通じてみな経験していたことです。確かにライフスタイルの多様化でこういう機会に出会えるチャンスが少なくなっているものの、学校を通じてしか体験できないのが現状のように残念に思います。

ほとんどの子供たちが、はじめて体験することなのですが、最初のうちは遠慮しがちな子供たちも慣れてくると、手際よくこなす様になっていきます。

ワカメもホタテの体験学習もどちらも、真冬の寒い時期に行うのですが、作業が一通り終わってから、メカブを茹でて食べさせたり、ホタテを蒸して食べさせたりすると、「オンちゃん(オンちゃんがよ) 休みの日に手伝いにくつからまた食べさせで！」と言ってくる子供もいます。体験学習の指導と言うだけではなく自分にとっても子供たちと接するいい機会になっています。

将来、漁業後継者にならずとも、せっかく海が目の前にあるのだから、今の時期には何が獲れるのか、どうやって獲るのかなど、「ある程度は海のこと知ってて損はない

ぞー」と話しながら接しています。漁業士としての役割を考えると、こういった活動はなくてはならないものだと思いますが、お世話するのは、正直大変です。しかし、これからの出来る範囲で地域に貢献していきたいと思っています。



体験学習実施状況

マリンチャレンジスクールに参加して

指導漁業士 小野寺敏一

(志津川町漁業協同組合)

近年の漁業関係は、大変厳しい漁業経営状況になっておりますが、漁業士の皆さんは、漁業経営を様々な面から工夫をこらし、常に漁業を発展させようと頑張っていることと思います。しかし、我が国の漁業経営に打撃を与えるような原油の価格上昇と魚価の豊漁低迷により経営の圧

迫感が懸念される昨年でありましたが、二〇〇六年は漁業士の皆さんは漁民の指導者としてこれを超えるていかなければなりません。

この様な、厳しい状況の中で昨年七月二十八日にマリンチャレンジスクールが開催され、唐桑町から志津川町の沿海市町に在学する中学生二十八人が、漁業や海洋生物等について学びました。

この未来を担う子供たちに、我々漁業士はどの様に指導を行って、漁業とはどんなものを教えたらいのか心配です。

さて、子供達が我々漁業士と一緒に一日の勉強で如何に漁業の難しさを学ぶことが出来るのでしょうか？漁業のつらさ、そして漁業の楽しさを将来性にかける子供達がこの一つの学びで一人でも多く、漁業活性化の為に尽くすことが出来る様になることが、我々漁業士の願いです。

この子供達に負けないように我々漁業士、漁民は漁業に一生懸命邁進していかなければならないと心から教えられるような感じがします。

これにめげず皆さんが頑張っていることと近年は、漁業には打ち勝つことが出来ない経営状況にあると私は思います。

皆さん健康に十二分留意し二〇〇六年度を打ち勝つていこうではないでしょうか。

最後になりますが、皆さんの健康勝とご多幸を心からお願ひ申し上げます。



講演する小野寺敏一指導漁業士

★国内視察研修報告★

指導漁業士 阿部 悟

指導漁業士 阿部 正春

青年漁業士 内海 信吉

青年漁業士 平塚 喜市

平成十七年九月十三日から十五日

にかけて、漁業体験学習及び観光漁業の取り組みに関する最新の知識について国内の先進事例を研修し、漁業士として地域振興に係る実践力向上を図ることを目的とした漁業士研修事業が実施されました。視察研修先は、静岡県水産試験場伊豆分場、南伊豆町漁業協同組合、妻良観光協会、伊東市漁業協同組合です。視察研修の概要は次のとおりです。

○静岡県水産試験場伊豆分場

技師の山田さんから静岡県の水産業の概要について紹介が行われまし

た。当県からも宮城県の水産業及び宮城県漁業士会活動についての紹介を行った後、静岡県東部漁業士会員と意見交換を行いました。

①静岡県水産業の概要

遠洋漁業は遠洋カツオ・マグロ旋網、延縄漁業です。沖合漁業は近海カツオ一本釣り、旋網、キンメダイ底延縄漁等となっています。沿岸漁業は刺網、船曳網、採介藻を行っています。特徴的なのは駿河湾でしか採れないサクラエビ漁です。サクラエビは二艘びきで漁獲します。水揚げはプール制であり、水揚げ金は均等に分けています。駿河湾は急深な湾であり海洋深層水の利用も盛んです。

漁業生産額はかつては一千億円以上ありましたが現在は六百億円を切っています。漁業生産量は全国第八位（宮城県は第二位）です。下田のキンメダイはブランド品となっており、テングサの生産量は全国第一位となっています。伊豆分場は昭和三十二年にテングサを量産するため試験場として発足しています。

②静岡県東部漁業士会との意見交換
漁業体験学習の取り組みや漁業士会活動について意見交換を行いました。

・阿部正春会長

漁業は買い手市場で苦しくなっている。消費者に漁業の仕事をわかってもらう取り組みが必要である。

・静岡県東部漁業士会員

学校側から依頼があれば、子供達に漁業の仕事についての話をしている。

・内海信吉青年漁業士

宮城県漁業士会南部支部では所属漁協、従事している漁業種類を記した名簿を作成し、周辺市町に渡してあり、要請があれば講師として出向いている。

・阿部正春会長

宮城県漁業士会では農業、林業の漁業以外の一次産業と交流会を毎年一回開催している。今後、物の交流も始めようとしている。

・静岡県東部漁業士会員

宮城県で行っている一次産業同士の交流会はないが豆腐づくりをするのに林業は枠の提供、漁業ではにがりを提供したことがある。

・内海信吉青年漁業士

一次産業に携わるもの同士、顔が分かる人から買えばお互い安心なものを買える。漁業では産廃になるカキ殻も農業では肥料で使ってもらえる。国産材も安く買える。それを使って家を建てている人もいる。一次産業間の交流が仲間内で広がっていくことが期待できる。

・阿部正春会長

漁協青年部で毎年開催している水産青年フォーラムでは漁業種類別の分科会を開催しており、当会では漁業士を助言者として各分科会に派遣している。漁業士になったからといって他の漁業者と変わらないという声があるが、他の漁業者を指導できる立場となる必要があることである。

③南伊豆漁業協同組合の取り組み

①南伊豆漁業協同組合の事業

組合で参事を務める山本昇孝さん



静岡県東部漁業士会との意見交換

にお話を伺いました。概要は次のとおりです。

昭和四十年十一月に九漁協が合併し南伊豆町漁協となりました。平成六年二月には信用事業を静岡県信漁連に事業統合しました。一戸一組合員制です。正組合員は八百名となっています。総代制をとっており、各支所に十名の総代をおいています。かつては二百名の総代でしたが、半分の百名にしました。職員数は二十年前は六十七名でしたが、現在は四十二名です。

当漁協の漁船勢力は五トン未満がほとんどです。水揚げは減少傾向にあります。直売所を開設しており、加工事業も行っています。加工品の販売額は三千四百万円となっています。漁協自営事業としてテングサ、アワビ、サザエ、トコブシを自営品として扱っています。蓄養池は3つ

あり、イセエビ、アワビ、サザエ、トコブシ、シッタカを蓄養し、販売しています。マダイ、ヒラメの放流にも取り組んでいます。

イセエビ漁で漁獲された規格外（八十グラム未満）のものを一匹三十円で買い取り、漁協で再放流しています。漁協が買い取らないと自家消費したり、規格外でも値段が付き流通してしまうためです。

青年部は五十歳定年制です。女性部は人数の減少により無くなりました。

②南伊豆漁業協同組合青年部の水産教室の取り組み

青年部長の平山敏郎さんにお話を伺いました。概要は次のとおりです。

宮城県の方が漁業は進んでいます。当方は観光漁業の取り組みは進んでいます。専業の漁業者は組合員の四分の一しかいません。

青壮年部は一時無くなりかけていた時期もありましたが、活動再開後、青壮年部の取り組みとして何をやるかということになりました。水産教室をやることになりました。金が無いので、子供達に我々が持っている知識を教えるしかありません。水産教室は五、六年生を対象としています。青壮年部単独でやるのも難しいので、町の教育委員会とタイアップして行っています。行政は横のつながりがないところがほとんどです。宮城でも教育委員会とタイアップして行うことを薦めます。五十四の学校に水産教室の案内を配っていますが、例年七十人から八十人の参加があります。

参加者をグループに分けて「無人島上陸」「沖釣り」「シュノーケリング」体験を行っています。当日は三十人の青年部員が総出で子供達の指導に当たります。今まで事故はありません。昼食ではバーベキューもやります。参加者のリピーターは多く大変好評です。

急激に魚を食べるようにはなりません。消費拡大の子供達相手に地道に取り組んでいきます。



南伊豆漁業協同組合（中央、右列）の取組について話を伺う

③南伊豆町妻良地区の漁業体験の取組

小中学校生を対象に漁業体験を行っている南伊豆町妻良地区の事業内容について、妻良観光協会の土屋会長からお話を伺いました。概要は次のとおりです。

妻良地区は住民が三百人未満、世帯数が百軒の部落です。七十歳以上は九十八人となっていますが、小学

生は五人、中学生は五人しかおらず高齢化が進んでいます。

伊豆半島は温泉で有名ですが、妻良には民宿はありますが温泉がありません。温泉がない町でいかにお客を呼ぶのが出発点でした。そこで始まったのが妻良地区の民宿に小学生を受け入れての漁業体験でした。昭和五十六年に当時の観光協会長が妻良に民宿に岐阜県の中学生を受け入れのが始まりました。この時に漁業体験として定置網の網起こし体験を実施したところ大変好評でした。その後、受け入れを希望する学校が増え、平成元年には二十五から三十校がくるようになりましたが、全ての学校の受け入れができなくなり、他の地区にも受け入れるところが広がっていきました。今年十七校を受け入れていきます。受け入れ先は岐阜、愛知県、群馬県、静岡県の学校が多くなっています。妻良で一泊し、東京に一泊するという組み合わせで実施する学校が多いです。当時の生徒が先生になって生徒を引率してお見えになることもあります。

旅行会社が間に入っていますが、企画立案、旅行会社、学校との連絡調整、民宿との調整、部屋の割り振りは当観光協会で行っています。午後に到着する学校が多く、入村式の後、各民宿に分かれ、夕食、入浴、民宿の主人との懇談会となります。私たちは、生徒さん方を受け入れる民宿全体を一つの観光ホテルと考えています。

翌朝の漁業体験は開始当初の定置網から刺網、カゴ漁業に変わって

ます。獲れたものはくじ引きで均等に民宿ごとに分けていきます。アジの干物作り体験は一人五尾ぐらい処理し、三十分ぐらいで終わります。乾燥させた完成品は後日学校に送っています。アジ干物作りの後の自由時間はボート、イカダ、釣り、磯遊びに分かれて過ごします。ボート、イカダ、釣り竿は各民宿毎に用意してあります。お昼は海辺で海鮮バーベキューで昼食です。アフターサービスも欠かせません。生徒達との交流を大切に、卒業時には民宿からお祝いの色紙とマーガレットを送っています。



妻良観光協会の土屋会長(上段中央)から話を伺う

○伊東市漁業協同組合の事業

魚市場で相模湾に水揚げされる魚を見学しました。当日水揚げが多かったのはゴマサバ、マアジ、ウルメイワシ等ですが、特産のキンメダイの水揚げもみられました。その後、

稲葉参事、菊池総務課長から漁協の事業内容についての話を伺い、特に漁協自営で行っているダイビング事業について詳しく話を伺いました。概要は次の通りです。

魚市場の水揚げは二十億円程度となっています。ダイビング事業の漁協直営は昭和六十三年から行っています。施設の利用料として千円をいただいております。年間六万人のダイバーが漁協施設を利用していきます。ダイビング自営事業を始めたきっかけは伊豆は観光地であり、人を集めやすいことがありますが、ダイビング事業はもうかる事業ではありません。しかし、漁協がやらなければ海の秩序（航路との区別、密漁等）を保っていきません。一度秩序が乱れると取り戻すのに莫大な労力が掛かります。ダイビング事業をやるうとする場合は以上のことを検討した上で始めるよう勧めます。



漁協直営のダイビングサービス

視察研修を振り返って

午前九時に仙台駅を出発し、最初の視察地である下田に到着したのは午後二時過ぎでした。下田は捕鯨基地で有名ですが、幕末に日米和親条約が結ばれた時に函館とともに最初の開港地となり、ペリー艦隊が入港したことも有名です。下田市にある静岡県水産試験場伊豆分場では、忙しいにもかかわらず津久井分場長さん、水産普及指導員の山田さん、静岡県東部漁業士会の会員の方々にも駆けつけていただき、地元漁業の貴重な話を聞くことができました。どこの海でも資源の減少や漁業種類間の調整に苦労していることが伺い知ることができました。

南伊豆漁協では、静岡県漁業協同組合青壮年部連合会会長を務めていらっしゃる平山さんから同漁協青年部が実施している水産教室の話を聞くことができました。本県においても県主催のマリンチャレンジスクールや各地で漁業士による地域の特色を生かした体験学習の取り組みが行われていますが、南伊豆漁協青年部の取り組みはかなり大がかりなもので、視察参加者の想像を超えたものでした。無人島上陸や沖釣り、シュノーケルリング、バーベキュー等、実施には大勢の協力と安全確保体制が必要です。

また、同漁協の施設見学では、直売所やイセエビ、アワビの蓄養施設を案内していただきました。蓄養施設は戦争時に作られた防空壕を利用

したものであり、外は真夏の暑さでしたが、中に入るとひんやりしました。このため、水温は若干冷却しているとのことでしたが、水温を十六度から十七度に保つのに経費はあまり掛からないそうです。蓄養施設の近くには海女さんが水揚げしたものを集める集荷所があり、海女さんがその日の漁で獲れたシツカやアワビを水揚げしていました。海女さんの中には七十過ぎの方もいて我々を驚かせました。まさに漁業者は生涯現役です。

修学旅行の受け入れを行っている南伊豆町妻良地区はどこにでもある漁港の一つにみえました。民宿は個々にありながらも民宿全体をホテルとみなし、漁業体験・漁村体験メニューを一体となつて提供していくアイディアは二十年以上経つても受け入れられています。土屋会長から参考資料でいただいた修学旅行生の写真はどれも楽しそうでした。漁業、漁村の持つ魅力を再認識し、新たな可能性に触れた思いでした。

伊東市漁協は首都圏に近く、同漁協直営のダイビングサービスには大勢の人が訪れるということでした。それでも稲葉参事さんからは、ダイビング事業は儲かる事業ではない。海の秩序を守るためにやっているという言葉がとても印象に残りました。私達が視察に行った時は九月中旬でしたが、伊豆半島はまだ真夏のような日差しが降り注いでいました。このような中、いずれの視察地でも快く受け入れてくださり、現地においては丁寧に参加者の疑問・質問に

お答えいただきました。心から感謝申し上げます。

漁業士会からのお知らせ

海人では、皆様からの原稿を募集しています。内容は自由で四〇〇字詰め原稿用紙一枚から二枚にまとめ、漁業士会事務局まで送付してください。寄稿をお待ちしております。

トピックス

宮城県林業研究会連絡協議会五十周年記念行事への参加

宮城県林業研究会連絡協議会五十周年記念行事が平成十七年十一月二十日に勾当台公園で開催され、当会では宮城県漁協青年団体連絡協議会とともに出展しました。宮城県林業研究会連絡協議会は、林業技術や集団活動方法に習得研鑽と会員相互の親睦を図る目的で昭和三十一年に設立されました。当会とは、一次産業に携わる担い手の交流を図るために平成十二年から開催されている一次産業交流会において会員相互の交流を深めており、記念行事の参加要請に応じ、ホタテ焼き、サケのチャンチャン焼きの試食を行いました。ホタテを焼く香ばしい匂いに長蛇の列ができ、用意したホタテ二百五十枚、サケ七尾はあっという間に無くなりました。



ホタテ焼きに長蛇の列

阿部正春会長「お魚ソムリエ講座」で体験学習実施

宮城県では、水産業が盛んな石巻圏域に居住する親子を対象に、「学ぶ、さわる、食べてみる」をコンセプトとして魚や水産業を知る機会を提供し、地域の水産の豆博士を育てるための事業「お魚ソムリエ講座」を平成十五年から実施しています。今年は「ノリの種付けから加工・消費まで」をメインテーマに計三回開催され、親子四十名が参加しました。講師には宮城県漁業士会の阿部会長を始め、石巻湾漁業協同組合のノリ養殖業者の方が務めました。講座では、ノリが出来上がるまでの講義の他、陸上採苗や糸状体の観察、ノリ摘み体験、ノリ漉き体験、加工場見学、ノリを使った料理教室まで

盛りだくさんな内容で行われました。第三回目の講座修了後に受講者全員に修了書が授与され、今回もたくさんのお水産博士が誕生しました。



ノリ漉きを指導する阿部正春会長

第七回宮城県青年・女性漁業者交流大会について

平成十七年八月二十五日に七ヶ浜町の七ヶ浜国際村を会場として第七回宮城県青年・女性漁業者交流大会が開催され、青年三団体、女性グループ三団体の計六団体が日ごろの活動の成果について発表しました。宮城県漁業士会からは、阿部正春会長が審査員として出席しました。

審査の結果、平成十八年三月八日、九日の両日に東京都で開催される全国大会には気仙沼地区漁業協同組合（階上本所）青年部千尋会（発表者藤田純一さん）と寄磯漁協女性部（発表者 遠藤幸子さん）が推薦

されました。



最優秀賞を受賞した寄磯漁協女性部

海の子作文から

宮城県漁協女性部連絡協議会主催の「第二十二回みやぎの海の子作文コンクール」において「宮城県知事賞」に輝いた南三陸町立戸倉小学校六年三浦将平くんの作品を紹介しましょう。

「お父さんは潜水士」

南三陸町立戸倉小学校六年

三浦 将平

ブクブクブク。海の中から、大きな空気のかたまりが上がってくる。お父さんがゆっくりと海の底から戻ってきた。ぼくのお父さんは潜水士だ。潜水士という職業を知らない人も多いのではないと思う。お父さんは三陸の海に毎日のように潜ってウニなどを採る。

お父さんの仕事の様子が知りたく

て、ぼくはお父さんに連れられて仕事場に行った。その日は夏の太陽がじりじりと照りつけてとても暑かった。

お父さんは三人で働いている。着替えを終えたお父さんは、宇宙飛行士のような服を着て、体に重いなまりをつけている。海中で浮いてこないようにするため。身につける装備の総重量は約七十キロ位だそう。ぼくを二人おんぶして潜っているようなものだ。そんなに重い装備をつけて、お父さんは海に潜っているのだ。

潜水中、お父さんは二本のロープでつながれている。一本は空気を送るホース。二本目はウニを上げるロープだ。この一本目のロープは、お父さんの命づな。大事な命を守るためのロープである。ウニを必要分をとった後に、スピーカーを通してお父さんが、「上がるよ。」と話すと、船の上にいる一緒に仕事をしているおじさん達が命づなをゆっくりと引っ張り上げる。時間をかけてゆっくりと海上に上がっていかないと水圧が体にかかって、潜水病というおそろしい病気にかかるからだ。だから、仕事仲間のおじさん達も細心の注意をはらい、神経をときずませて引っ張り上げるのだ。

船に上がったお父さんはとても疲れた顔をしている。ウニを探して一日に六時間くらい海底を歩き回っているからだ。ぼくには一人で暗い海底を歩き回なんてできないなあと思う。厳しい仕事だ。

お父さんはおじさん達に命を預け

ている。おじさん達は万が一のことが起こらないように、船の上から色々な注意をお父さんに話す。その顔はとても真剣で、そしてとても輝いている。三人で力を合わせて、毎日仕事をしているのだと考えたら、なぜだろう、胸がどきどきと高鳴ってきた。潜水士という仕事はすごい仕事だと思った。

お父さんはこの仕事に生きる喜びを感じているのだとぼくに話してくれた。それは海中の美しさや海の生物の生態に触れられるからだそう。お父さんはこの戸倉の海で育った。本当に海が好きなんだと思う。

ぼくはお父さんをほこりに思った。海を大切に守り、必要な分の獲物しかとらないお父さん。ぼくもできるなら、潜水士になりたい。そして、海中の美しさを見てみたい。ぼくもこの太平洋を見つめて育った子供だから。お父さんの子供だから。

訃報

熱海健悦指導漁業士（鳴瀬町漁協所属）が、平成十七年四月二十八日に不慮の事故によりご逝去されました。

会員一同謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈りいたします。

海人編集委員

編集委員長

北部委員

中部委員

南部委員

阿部 長喜

及川 淳宏

青山 喜一

三浦 一郎